

児童は物語をどのように読み深めるか(1)

—授業場面での「劇づくり」を中心として—

神田 真理子

お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科

〔問題と目的〕

国語科の授業での協同的学習の際に、児童は文章の読みをどのように深めるかを探るため、学習後に、物語文の内容に関する文章理解テスト(選択式問題・知識を再構築して表現することが必要な記述式問題)を実施する。

特に、「劇をつくる」というグループ活動によって、登場人物の心情の理解が深められるのではないかという予測をもとに、文章理解テストの結果を検討する。

〔方法〕

対象: 都内国立小学校5年生2学級

(それぞれAB群とし、同じ授業者が担当する)

A: 劇づくり中心群: 40名(以下、「劇中心」群)

B: グループ読みのみ群: 38名(「グループ読み」群)

期間: 2001年1～3月実施(ともに14時間の授業)

材料文: 物語文: 杉みき子「わらぐつの中の神様」

授業展開: 学習方法決定のための話し合い→

グループ内での読み(全文通読・内容理解)→グループ毎の発表(2学級とも読解内容を報告する、

Aの劇中心群は劇の練習・実演も行う)→文章理解テスト

※グループは原則として4人1組、座席順とした。

文章理解テスト:

物語の内容について、次の2つの基準により計16問を作成し、児童に回答を求めた。

・推論の必要度(①選択問題12問※4項選択、

②推論の必要な記述式問題4問※1問ごとに2要素)

・設問の内容(i 登場人物の「行動」の理解、

ii 物語の「設定」に関する理解、iii 登場人物の

「心情」の理解: i は①4問、ii・iii は①が各4問

②が各2問)

※文章理解テストとともに、学年相当の芝式語彙検査を実施した。

〔結果〕

理解度テストの得点

①選択問題: 1点×12問、2記述問題2点×4問計16問、20点満点とした。A「劇中心」群: 平均(SD)=15.5(4.6)、B「グループ読み」群: 平均(SD)=13.8(5.2)であった。分散分析結果、群の効果は有意でなかった。

語彙力と文章理解テストの関連

語彙検査の偏差得点は、A群: 平均(SD)=53.5(10.2)、B群: 平均(SD)=50.1(9.8)であった。語彙検査の偏差得点の分散分析の結果、群の平均差は有意でなかった。また、2群ともに、語彙検査の偏差得点と文章理解テストの総計得点の間に、相関はそれぞれ見られなかった。

「行動」の理解

問題タイプは選択問題のみで4点満点。A群: 平均(SD)=3.5(0.5)、B群: 平均(SD)=3.4(0.5)で、2群の平均差は有意でなかった。

「設定」の理解

選択問題4点、記述問題4点を最大とする。群(2)×問題タイプ(2)の分散分析の結果、問題タイプの主効果($F(1,1)=22.06$ $p<.05$)のみが有意であった。

「心情」の理解

選択問題4点、記述問題4点を最大とする。群(2)×問題タイプ(2)の分散分析の結果、群の主効果($F(1,1)=7.61$ $p<.05$)のみが有意であった。

〔考察〕

文章理解テストの登場人物の「心情」に関する設問の結果から、予測のように、「劇中心」群は「グループ読み」群よりも、登場人物の「心情」を理解していたことが示唆された。劇をつくる活動の過程では、登場人物を言葉と身体によって演じるために、登場人物の「心情」を十分意識した読みがなされるようになると考えられる。

一方で、事柄の背景や人物のキャラクターなどの物語の「設定」をどれだけ理解しているかを、知識を活用しながら各自の言葉で記述することは、「設定」について選択式で回答するよりも、5年生の児童にとって概して容易ではなかったようである。選択式問題の登場人物の「行動」に関する理解の得点が2群ともに高いのは、物語の展開を把握した際の知識を活用しやすかったためと考えられる。

今後は、この一連の授業における教師の児童に対する評価・児童の自己評価、発話プロトコル、および観察の記録についての分析を行い、協同的学習のなかで、物語の読解がどのように進められるのかを追究していくこととする。